
特別寄稿

医療看護研究31 P. 1-8 (2023)

発達障害の大学生の支援について**Support for University Students with Developmental Disabilities****内山 登紀夫¹⁾**
UCHIYAMA Tokio**I. 発達障害の大学生の支援について****1. はじめに**

大学生との関りは、クリニックの主治医をずっとしているため、そこで小さい子どもたち、子どものときに診ていた子が大学生になってというケースもあれば、最初から大学生として来る人ももちろんいる。

また教員も女子大学、国立大学、私学といろいろ経験し、教員として関わることももちろんあった。さらに、職員や他の教師から非公式に相談を受けることもたくさんあった。これらの経験をもとに話を進めていく。

2. 社会の変化、理解の変化

一昔前は、大学生で発達障害の方はいるのかといった質問が結構あった。実のところ、大学生の発達障害は昔からいる。筆者は昭和58年卒だが、今思えば当時、自分のクラスに発達障害の学生はたくさん、たぶん10人ぐらいはいたと考えられる。おそらく診断がついていないだけで、発達障害の学生は昔から存在する。

3. 概念や自閉スペクトラム症の文化、カモフラージュについて

大学で発達障害の学生を教育するには、どんな支援目標を決めていくか、当事者の発信をどう重視するか、ニューロダイバーシティ、神経多様性の考え方も折に触れていきたいと思う。20世紀、つまり筆者らが学生の頃は、健常児と障害児は明確に分かれていて、実際には発達障害の学生は大学にもいたが、話題にもならなかった。21世紀になると、発達障害と定型発達

なる部分があるという考えがだんだん広まり、神経科学研究でもそのような考え方にあった知見が増えてきた。ニューロティピカルとニューロダイバージェントという言い方が普及してきた。ニューロティピカルとは「神経学的な典型者」という意味である。ウェンディ・ローソンという優秀な心理学者で自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) の方がいる。子ども時代に診断をされた際には、将来おそらく何にもできないだろうと言われたが、多くの社会貢献をしている。ジェーン・マイヤーキングはニューロダイバージェント運動、神経多様性運動の初期に活躍した当事者の一人である。1998年に自分のブログにこう書いている。『私は以前、自分は他の人たちと同じだと思っていた。色々考えると、自分の脳が違っていることに気付いた。特に神経学領域に入っていった。しかし私はこれまでの通常の、つまり主流の説明体系では満足できなかった。例えば、何かにこだわるときにわがままだとか、食べ物で偏食があるときにしつけが悪いとか、こういう心理学的な説明が多かったが、それには当てはまらず、このような説明がうまく機能したことはありません』と述べている。今は社会モデルが色々なところで言われている。車椅子の方は、例えば階段が社会的障壁になり、スロープがあるとうまくいくことから、こういうサポートが必要だとわかる。アイコンとして目で見えるので、非常に分かりやすい。視覚、聴覚、身体障害、認知障害も発達障害と比較して分かりやすい。認知症は身近な障害で身内に認知症の人がいる方は少なくない。

一方、発達障害や軽度の知的障害というのは、何が社会的障壁なのかということが非常に分かりにくい障害だと考える。このことを理解するためにそれなりの知識が要ると思われる。ASDは、DSM-5の定義（ア

1) 福島学院大学 福祉学部 福祉心理学科
Department of Welfare Psychology, Fukushima College

メリカ精神医学会の基準)だと、社会的コミュニケーションと行動、興味、活動が限定的で色々なことが反復する。うまく友達と付き合えない、非言語のコミュニケーションがうまくいかない、対人関係を維持できないことである。同じことを繰り返したり、ルーティンに固執したり、興味が限定されている等、環境の感覚的側面に対する極端な強さ、鈍さがみられ、感覚の過敏や鈍感という意味である。それが現在の診断基準になっている。さらに、もう1つの代表的な発達障害の注意欠如多動性障害(ADHD)または注意欠如多動症ともいうが、これは12歳になる前から不注意と多動と衝動性が、2つ以上の場面であるということで定義される。大人のADHDを診るときは、実はこの不注意とか多動というのは、気分障害とか不安障害でもよくある症状である。そのため、本当は除外診断しなければいけないが、大学の相談室の先生や教職員さんに話すと、発達障害が有名になってきたことから、少し落ち着きがないと「ADHDじゃないですか」とよく聞かれる。しかし、実際面接をすると不安障害であったり、時には統合失調症であったり、他の障害も考えられるため、診断するときはやはり専門家に相談したほうがよいと考える。

数十年前のアメリカのCDCの調査では自閉症と診断された人のほとんどが、知的障害があるといわれていた。しかし現在はそれが徐々に否定され、IQ85以上の人が42%と報告されている。おそらく日本の場合、さらにIQが高い人が多いと感じる。知的障害を合併した人が35%、境界域が23%とであり、この方々は大体、大学に入学してくる。もう少し厳密にすると、IQ70以下の人も結構、大学には入っている。つまり大学生の中にASDの人がたくさんいるということは間違いないと言える。どの学部でもいると考える。

4. 発達障害で気を付けてほしいこと

ASDは「コミュニケーションの障害」と「こだわり・限定的で反復的な行動」で定義はされるが、実際には彼らはもっとたくさん他の問題を抱えていることが多い。例えば知的発達の問題や、ADHDであったり、限局性学習症(文字の読み書きの苦手)、はチックなども合併しやすい。医学的な合併症としては、睡眠の問題、てんかん、代謝疾患、パーキンソン病も多いといわれている。衝動のコントロールが苦手な場合もあり、具体的にはかんしゃくや攻撃性、自傷があったりする。精神的な問題としては、うつや不安、強迫、

カタトニアがある。カタトニアというのは運動に時間がかかる、行動が固まる、停止する現象である。実際に皆さんが発達障害の学生と付き合うときには、この中核的な症状がメインの学生ももちろんいるが、抑うつや不安が非常に目立つ学生が多いと思う。またコロナ禍になってから、睡眠障害も随分増えてきたと思う。発達障害は、かんしゃくや攻撃性といった、少し扱いにくい学生のイメージをもつ方が多いようだが、実際にはこのような行動がなく、目立たないおとなしい学生の中にも、発達障害の学生は多数存在すると考えたほうがよい。

ASDを理解するためには彼らのラーニングスタイルを理解することが必要である。ラーニングスタイルとは勉強の仕方だけではなく、ものの学び方、色々な感じ方、理解の仕方のスタイルといった意味であるが、ASDの人はラーニングスタイルが多数派の人とは違っている。そのためニューロダイバージェント、神経多様性という視点が必要になる。ASDの人のラーニングスタイルが劣っているという意味ではなく、ユニークで多数派とは違う。ユニークだから、ユニークな強みと困難も作り出す可能性がある。

ストレングスマodel、つまりなるべく強みを大切にして困難をサポートすることが最近20~30年のムーブメントとなっている。

ASDの人の表面に現れている行動、例えばイライラしている、怒りっぽい、あるいは抑うつ、不安といった現象の基底にはASDの特性やラーニングスタイルの特殊性を理解する必要がある。このような表面に現れた言動(氷山の海上に見えている部分)の基底には海の下に隠れている大きな部分から考慮する必要がある。このような考え方を冰山モデルというが、氷山の下にはいろんな認知の特徴があり、これが脳の機能である。そのため、ここから攻めていくことが必要になる。攻めるといっても、脳の手術をしたり、薬を使うわけではなく、彼らの脳機能のスタイルをこちらが理解するということが大事となる。

学習スタイル・ラーニングスタイルは狭い意味での勉強だけではなく、全ての活動、例えば、家事を学んだり、あるいは文字を学んだり、あるいは社会スキルを学ぶということを含む。皆、子どものときから色々なことを学びながら生きている。学習スタイルは物事を理解したり、プランしたり、記憶したり、現実に応用する方法である。ASDの人を理解するときに、この学習スタイルが多数派とは違う、という見方が大事

になる。なぜ違うかという、脳の機能が違うからである。このことは、ここ20~30年の神経科学の進歩があり、ファンクショナルMRI（機能的MRI）研究が活発になった。ファンクショナルMRIでは被験者に課題を行い、脳のどの部分が活発になっているかがリアルタイムでわかる。これにより同じ課題を実行していても脳の活性化する部位が異なり、一般人とは随分違う方法で脳が機能しているということが分かってきた。

ASDのラーニングスタイルの特徴について説明する。暗黙的な学習の苦手、聴覚情報の処理の苦手、弱い中枢性統合、注意の問題、実行機能障害、心の理論障害について順次説明していく。

暗黙的な学習とは、きちんと明示されない学習である。実は多くの社会的スキルは、暗黙的な学習で人々は身につけている。社会的スキルの多くは明示はされていない。例えば、大学の先生が「どんどん質問していいよ」と言っても100はしてはいけない、毎日してはまずい、そういうことは学校では教えてくれない。そのような自然に習得される学習、それが暗黙的な学習である。太っている人に「太っている」と言っているか、電車に乗ったときにガラガラだったら誰かのそばに座ってはいけないとか、あるいは混んでいたら多少そばで座ってもいいとか、そういうことを子どもは暗黙的に自然に学んでくわけである。ASDの大学生のAさんは得意なパソコンや英語は明示的な学習で身につける。マニュアルがあり明示的に学習できる。教科書のとおり学習する明示的な学習と暗黙的な学習を比較すると、ASDの人は具体的な指示に基づいて本を読んだり、マニュアルで身に付けていく明示的な学習は得意な人も多い。一方、暗黙的な学習、自然に習得されるような学習は苦手な人が多い。しかし、なかなかそれに気付かない学校の先生が多い。先生から、「これぐらい言わなくても分かるでしょ」、みたいなことを小学校で言われることから、彼らは苦労しているのである。前述のウェンディ・ローソンさんは、いろいろな本を書いているが、彼女の著作の一部を抜粋する。「私にできないのは、察して、解釈して、対話して、理解することの積み重ねで成り立つ複雑なシステムにきちんと参加すること、それができない。あと、私の脳はいつもただ感情を理解するだけのために大変な努力をしている。」相手が今、怒っているか、喜んでいるかとかいうのは、多くの方は別に努力して考えなくても、ぱっと直感的に分かると思う。ウェン

ディは心理学者で多くの論文も書き、論理的な思考力は非常にあるが、ぱっと見て相手が怒っているか、笑っているかとか、そういうことは分からなくはないが、わかるためにとても努力が要ると言っている。

このような相手の気持ちを読む課題というのはいくつかあり、その課題をASDの人と一般の人に与えると、ASDの人でも課題は解けるが、違う脳の部分使っているとか、一般人より時間がかかったり、努力が必要になっているということは、脳科学からわかってきた。

このようなラーニングスタイルの違いという視点にたてば、教育の方法も一般とは異なり、工夫が必要になる。その一例をあげるとソーシャルナラティブという方法がある。目に見えないルールや、対人関係を視覚化する。例えば、困った状況の事実を文章化して「上司に強く叱責された」と書く。次に「気持ちの文」を「落ち込んだ」と書く。次に「お助け文」を書く。「あれは上司が厳しいよね」などと、いろいろな人がいろんなアドバイスをする。「でもちょっと言い方がまずかったよね」とか、「丁寧語使えばよかったよね」とか、「上司の機嫌のいいとき狙えばよかったよね」とか、そういうことをいろいろ書いて、自分はこれで解決しますといったいわゆる枠組みを作って、ASDの人と一緒に対話していくと、頭の中が整理されてくということがある。このような、いろいろな困ったことを視覚化して構造化することで、見えない部分を視覚化・可視化することが役立つ。

コロナになって多くの講義が、対面からZoomになっているが、ASDの人はリモート講義のほうが楽だという人が多い。これは何回でも見えるということもあれば、事前に必ずレジュメが送られてくることができるとか、そういったことも関係している。暗黙的な学習が苦手という学習スタイルがあるため、何をすべきかを明確にするためには、直接的、明示的な指示、なるべく具体的な指示の言葉を使う。「これはしてください」、「これはやめてください」ということである。新しいことを教えるときは、なるべく視覚化する。大学生の場合は、文字とか、パワーポイントとか、あるいは図示を使っていくとよい。社会的に期待されていることの隠れたルールを説明するために、ナラティブを作る。先ほどのAさんの例では、教授が「どんどん質問しなさい」と言った。それが表のルールである。しかし、隠れたルールは、実は教授は忙しく、質問は1日1回、

あるいは1日10分という、具体的な枠組みを決めて指導する必要がある。

視覚化する方法の1つとして、コミック会話の方法がある。「花子ちゃん元気?」「元気だけど」と答える。しかし花子ちゃんは頭の中では「知らない子だ、怖い」と考えているかもしれない。「元気」と言ったときに、この男の子は「隣のクラスの花子ちゃんだ、花子ちゃんと話してみたい」と考え「ステゴザウルスとかトリケラトプスが戦ったらどっちが強いと思う?」と、男の子は好きな恐竜の話をする。花子ちゃんは、突然何の話と思う。

実際の言葉を実線の枠の中に書き、頭の中では花子ちゃんはこう考えているかもしれないということは点々の枠の中で書く。このように、ASDの子にもそうではない子にも、出された言葉と頭の中は結構違うということを意識して図示して教えていく。このことは大学生でも有効である。「教授にこんなこと言われたんだけど」とか、「〇〇さんにこう言われたけど」と言われたときに、こういう絵を描きながら考えていくと、解決することもある。

5. 合理的配慮（調整）

日本では、SST (Social Skill Training) が盛んである。就職活動を発達障害の子が行うときに次のような指導をする先生もいる。例えば、「今日は暑いね」と聞かれ、「私は暑くないです」と答える。これは駄目な例で、上司が「今日は暑いね」と言ったら、「はい、クーラーの設定下げましょうか」と言う教える。しかし、実は「今日は暑い」とただ思っただけかもしれない。クーラーは嫌いかもしれない。そのため、こういう教え方をしていると、バリエーションが増え、かえって難しかったりする。

上司は、もしクーラーの設定下げしてほしいのであれば、自分でやればいい。あるいは部下に具体的に「27度に下げて」という指示をすればよい。これが合理的調整である。調整と訳したが、一般には合理的配慮と表現される。これが公式の訳だが、元の語は Reasonable Adjustment という。配慮というより調整である。配慮はちょっと上から目線でやってあげている感があるので、筆者は使いたくない訳語である。調整 (adjustment) はきちんとしなければいけない、そうしないと機能しないので、当事者も周囲の人も不利益を被る可能性がある。ASD の特性に聴覚的情報処理が苦手であるが、その反面、視覚的な情報、目で

見ることは強いことが多い。そのため視覚を使っていくことが求められる。ASD の人は抽象的の言葉が難しく、具体的、あるいは字義どおり解釈する傾向がある。例えばトラフィックジャムという英語の表現は渋滞を意味している。トラフィックジャムときいて、車にジャムがくっついている映像を浮かべる ASD の子どももいる。英語でも日本語でも、いろんなイディオムがある。例えば「お風呂を見ていてね」は、お風呂を見ていてではなく、お風呂が沸いたら教えてということである。そういうことがなかなか通じにくいので、なるべくそういうイディオムとかを使わず、直接的に言ったほうが本人は混乱しない。筆者も日頃から意識しているが、相手が大学生だと、これぐらい分かるだろうと思ってつい言ってしまうことがある。大学生と就活で困っている話をした際に、僕から、「いろいろあるけど、取りあえず目の前のことから片付けようよ」と言ったら、目の前に何もなかったので、「どれを片付けるのですか」と言われたことがある。

もう1つ多いのが言語処理の差である。早口だと通じない。あるいは1対1で話していると理解できるが、5~6人で一遍にしゃべるとわからなくなることがある。分かっている処理が遅いということがある。

動物学の教授であるテンブル・グランディンさんという方は、典型的な ASD で、日本にも何度か来て筆者とも何度か会ったことがある。彼女は絵で考えるという。言葉は第2言語のようなもので、話されている言葉も書かれている言葉も、頭の中でビデオのように再生されるか、音声付きのフルカラー動画に翻訳する。頭の中で視覚的に翻訳している。誰かがテンブルに話しかけると、その言葉は即座に絵に翻訳されるという。テンブルさんはハッピーというのはよく分からないと書いてある。幸福という概念をいろいろ考えるうちに分からなくなり、寒いときに暖かくなるとハッピーみたいに、温度差ではないかとか考えたがあった。彼女は何度も日本に来ており、一緒に講演会をしたこともあるが、大学の先生であり、講演は非常に上手で、つい把握している僕らも、通訳の方を介して話すと、「私は ASD なんだから、もっとゆっくり話してくれ」と言われたことがある。あと、固まってしまうことも何度かあった。横浜で講演会をしたときに、ホテルのレストランでランチを取ろうとメニューを渡すと黙ってしまい「何か選んで」と言っても3~4分経過し、どうしたのだろうかと思うと、彼女の予想以上に高かったということであった。「ランチは普通1000円ぐらい

だと思っていたら、2000とか3000円と書いてあり、少し頭の中がパニックになって、2～3分かかりました」と言っていた。大学の先生のような方でも、そういうことがある。

字義どおりに解釈したり、文脈の理解不足も多い。ウエンディさんは車の運転を習っていたときのこと、教官に「もっと後方に注意しなさい」と言われ、自分の背中を触ってみた。次に座席の背もたれも調べた。さらに体をひねって後ろを見たという。

日本人の方の有名な本で、『変光星』の著者は子どものときのこと回想し、12歳のときに死にたくなって、いのちの電話に電話している。そこでまず相手が「何歳ですか」と聞き、「12歳です」と答えた。次に「どこに住んでいるか」と聞き、「ここに住んでいます」と答えたら、相手がふざけて電話していると思い怒ったという誤解を生じたことも記載されている。我々はいついつい字義どおりにうけとる人がいると、何かふざけているのではないか、からかっているのではないかとか思うが、実は本人たちは大真面目ということも多い。

「もっとちゃんとしなさい」は、親御さんも学校の先生もよく使う言葉である。この「ちゃんとしなさい」というのを、時間を取って絵にしてみるという課題を出す。そうすると、きちんと座る、字をきれいに書く、食器を片付ける、のように色々な状況が考えられる。色々な意味に捉えられる言葉というのは、非常に本人を混乱させる。なるべく具体的な言葉を使っていくことが大事になる。具体例は視覚化することができる。例えば「ちゃんとしなさい」と言うときに、「真っすぐ立つ」とか「椅子に座る」など状況によって意味が違うので、その状況で期待されていることの具体的な指示をすることが大切になる。現場で役立つのは手順書や指示書、メールである。口頭の指示はうまくいかないことが多い。これは多くのASDの学生が「リモートのほうがよかった」と言う1つの理由である。リモート学習であれば、講義のあとにアクションペーパーを送り、何月何日までに返信しなさいとGoogleフォーム等で返信することになり、講義中に曖昧な口頭指示で宿題を告げられるよりは、ずっと分かりやすかったという意見が多かった。

抽象的、多義的な言葉を避ける必要があることがわかる例として、看護学生さんのケースでは、「点滴絞って」と言われて、点滴をどう絞っていいか分からなかったそうである。本当に上のほう絞ろうとしたら怒られたということであった。また「患者さんの様子を

見て」と言われて、何を見ていいか分からなかったというような相談を受けたことがある。彼らは時間がかかるため、たくさんをを一遍に言うより、情報を処理して応答を考える時間を与える、少し待つということも大事である。もし指示が絵にできないとしたら、抽象的過ぎるかもしれないと考え、なるべく具体的な指示にしていくということが必要だ。

弱い中枢性統合という概念がある。全体より部分に注目しやすい傾向を指す。心理学で使う錯視の実験が有名である。実際には同じ大きさの丸が描かれた背景の異なる2枚のカードを見比べた時、下の黒丸のほうが大きく見えるように感じる錯覚では多くの定型発達の方は下のほうが大きいと答える。しかし、ASDの人は両方同じ大きさですと答える人が多いといわれている。背景を見ていないので、間違いなく正確に大小を判断できる。正確さという意味であれば、ASDの人のほうが多数派よりも正しい。同様にコーヒービーンズという隠し絵には、コーヒー豆の中にコーヒー豆に似た顔の絵がある。この顔の絵を見つけるのが、ASDの人のほうが一般の人よりも早いといわれている。それは一つ一つ丁寧にスキャンしているからだと考えられる。一般の人はぱっと見て、コーヒーだというふうな大きな概念でくくってしまうので、この顔が見えなくなってしまう。

運動会の一部を撮影した写真など、写っているもので場面を想像できるような写真を見せることもよくある。「これ何ですか」とASDの人に聞くと、「これはマンションです」、「これは旗です」と部分に注目して答える傾向がある。全体をみれば運動会だと思える写真も、部分に注目するのでASDの人は運動会という全体を捉えないことがある。ASDの人は学者の中にも多いといわれ、それは学問領域によっては部分を緻密に見ていくことがよく役立つからだといわれている。

もう1つ主要な心理学の実験として、大きなアルファベットを小さなアルファベットを使って表示しているイラストを見て判断する実験がある。例えば大きなSは実際には小さなHがたくさん並んで書かれている。これも定型発達の人に聞くと、大きなアルファベットを捉えてSと答える人が多く、ASDの人に聞くと小さなアルファベットを捉えてHと答える人が多い。部分に注目しやすい傾向は細部に注意が向くという長所でもあるが、全体を捉えるのが苦手であるという短所でもある。雰囲気や時間の流れは全体である。これらは注目しにくく、雰囲気がよく分からない苦手

につながる。

注意移行（アテンションシフト）という概念がある。我々はあることに焦点当て、そこから焦点を離して次のことに焦点当てている。英語で表現すればエンゲージ、ディスエンゲージ、エンゲージと言う作業を繰り返している。例えば、たくさんのスライド見せられても、それに関して不愉快な人は、それほど多くないと思われる。それはなぜかという注意の移行が簡単にできているからである。これができない人にとっては辛く、ASDの人はこの注意の移行でよく戸惑っている。なかなか1つのことから別のことに注意が移れないということがあるのではないかと考える。

以上の特徴を踏まえて、どのように介入したらよいかということについて、中枢性統合の弱さや、注意の切り替えの苦手な注目する。構造化され、環境が区分され、Aブロック、Bブロックのように整理されるとよい。例えばオベ室は高度に構造化されていて、ASDの人にとっては比較的分かりやすい環境ではないかと思われる。あることに注意を向け、持続させるために環境を区分して整理するとよい。重要な情報に注意を向けるために、視覚的構造化といって、見て分かりやすい視覚的な枠組みを作る。注意を切り替えるのを援助するために、さまざまな視覚的手掛かりを使う。簡単な例では、大学生では、スマホのスケジュールアプリがある。「スケジュールアプリ出してみて」と言い、「今何時だからこれしようね」とスマホ、タブレットを見せると移りやすい。あるいは、次の講義が実習であれば、実習先の写真を見せて「次は実習だよね」と言うと注意が移行しやすい。

また、特別に何かに興味がある人、先ほどのウェンディさんの話では、ミツバチとかハチミツとか機関車トーマスなどに興味があった。そのような興味の対象を取り入れると移りやすい。例えば、度々手帳をなくすトーマスが好きな大学生がいたため、トーマスのシールを手帳に貼るとなくさなくなった。そういった単純なこともある。

親御さんから、新幹線に乗ると、非常ベル押したくなって困りますという訴えがあった。実はよく見ると、非常ベルの掲示に「強く押す」と書いているため押してしまうようである。文字には反応しやすいのが特徴である。実際には、非常のときに押すよう記載があるが、情報が多すぎて「非常のとき」という条件に目がいきにくい。「非常の場合のみ押す」とシンプルに書いてあるほうが分かりやすい。

また実行機能という概念がある。実行機能が障害されると色々なことを整理、順序立て、計画することや物事を開始することが困難になる。また、どういう状態であれば終わりなのかという概念が持ちにくい。そのため、いつまでたっても仕事している、勉強していることになり、熱心ではあるが、終われない人もいる。セットシフティングは、自分の気持ちの切り替え、課題の切り替え、シフトすることであるが、それを柔軟にシフトすることができにくい。これが実行機能障害という症状である。多くの研究がされていて前頭前野、前頭葉のさらに前のほうの機能の障害であることが分かっている。そこで手順書を決めて、視覚的に提示し、活動の順序を視覚的に提供する。病院は、他の普通の会社と比べると、視覚的構造化が機能的になされていることが多い。

自己モニタリングは、例えばタイマーを必ず12時にセットする、アプリで自分にリマインド送るといった方略で、毎日使えるルーティンの方略を学生と一緒に考える。さらに疲労してもなかなかやめられないという人が多く、何が自分にとってサインなのかを考えることをすすめる。例えば、体がごそごそ動き出す、落ち着きがなくなったら疲れているというサインであることを伝える。またあくびが3回出たら疲れているサインであること等、具体的な手掛かりを一緒に考える。

心の理論とは相手の意図を推測する能力のことをさす。定型発達の人には、目だけ見て相手の意図をある程度推測することができるがASDの人はそれが難しい。相手の意図を読むのが苦手であるのが、心の理論の障害である。誤解が多いのは、共感しないわけではないということである。ASDの子どもも共感し、泣いている子がいたらかわいそうだと思う。泣いている子は分かりやすいが、少し悲しんでいる顔を見て、それを悲しんでいるか分からないから、かわいそうだと思う。本当に悲しんでいると分かれば、とても共感性の高い人が多い。他者の視点と自分の視点が異なるということが理解しづらい。これも心の理論の障害である。例えば、いじめに遭っている子どもが「先生が何にもしてくれません」と言う。そのときに、「僕は先生には言ったの？」と、「先生はいじめられていることを知っているの？」と聞くと「知りません」という。自分の知っていることは相手も知っていると思ってしまう。これが他者の視点と自分の視点が異なることへの理解の不足である。

筆者は日本の番組にもなった『グッド・ドクター』

の字幕監修を行った。ショーンというグッド・ドクターにはリアという恋人がいる。リアがショーンの子を身ごもり、「おはよう、ベリー、どうしてママは僕にそれをさせるの」という。ベリーはブルーベリーのこことである。ショーンが、「君はこの子をどうしてベリーって呼んでいるの?」と聞く。リアは「今はブルーベリーぐらいの大きさだから、あなたにそっくりの顔をしたブルーベリーサイズのベビー」と答える。ここでリアはすごくうっとりし、ショーンに似た子ができることを嬉しがる様子がみられる。ショーンは今7週目だと、子どもの手足には水かきが付いていて、粘液線があると言い、キスしようとするが、このときは歯磨きの直後で、ミントのにおいがきつ過ぎて、やめると言われる場面である。しかし彼はまだ続けたので、「とにかく2人のベビーだから父親でいてください、ドクターじゃなくて」とリアに言われる。このような行き違いが結構ある。ショーンは共感性がないわけではない、グラスマンというショーンの父親代わりの外科部長に相談に行くのである。「2件目のオペが終わりました。オペはうまくいったけど、僕はうまくいっていません」と言い、グラスマンが「どうした」と聞くと、「リアが悲しんでいる。僕はどうやって元気づけたらいいのか分からない。分かりますか」と答えるのである。このようにASDの人は他者を何とか助けたいと考える。悲しんでいるということが分かると、元気づけたいのだが、その方法が分からないのである。相手の立場に立って考えるのが苦手なのである。相手の立場は抽象的で見えない。一方的で、相手の立場が見えない。そういう意味では、社会的なマナーや常識がないと言われるが、常識は明確ではなく抽象的で、状況で変わるため、ASDの人にとっては分かりにくい。どのようにサポートをするかということ、視覚的な手掛かりを使う。先ほどのコミックストリップカンパセッション等を使い、ソーシャルナラティブという手法を使う。社会性の理解を進め、教えて明確にする。予測されることを紙に書いてあげることとする。さっきのリアのケースでは、リアは悲しんでいるが、君は悲しんでない。リアはベリーちゃんと言うときはすごくうれしいのだということを見せていく。

6. ASDの感覚世界

感覚に関する問題もあり、音や光に非常に敏感な感覚世界に住んでいる。我々にとっても、うるさい場所は、ASDの人にとってみると、もっとうるさいのである。

そのような場面では何も話しかけず、優しい顔で、穏やかに横に座って、淡々と接すると良い。そこで「大丈夫?」「頑張りなさい」等いろいろ言うことで、かえって混乱するため、なるべく刺激をしないで落ち着くのを待つ。ゆったりとすることが大事である。

感覚処理はすごく影響を与える。彼らは高反応だったり低反応だったりするため、大きな音や、明るい光をなるべく避けてあげることが必要である。どの感覚にもその症状は現れる。音、光、においに敏感な子もいる。触覚、痛みにも敏感な人もいる。大学生でも痛くて注射ができないという人もいる。また、エレベーターなどの加速度刺激に過敏な人もいる。内臓感覚に過敏だったり鈍感だったりする。おなかがいっぱいになっていることや、トイレに行きたいということ、女性の場合は生理が始まったということが全然分からないという方もいる。

感覚処理は、色々な学習に影響を与えるため、これも刺激を減らして環境を区分して整理することが必要である。すっきりとした環境が良いので、穏やかで静かな場所を提供する。1日を通じて休憩をスケジュールに入れ込んだりする。例えば90分の講義は長いので、僕自身は45分で1回休ませるようにしている。そうすることで発達障害の学生も喜び、一般の学生も喜ぶ。

それでも色々なトラブルや苦情もある。発達障害の子がうるさいとか、ちょっかひを出すといったことである。そこだけ見るのではなく、今言ったような学習スタイルとか感覚の問題があるため、そこを見て解決策を探らないとうまくいかない。これは脳から考えるということである。

7. 大学としての支援

大学生の支援をする場合に教職員が色々なこと把握しなければいけないが、本人とどこまで情報を共有しているかということが重要である。日本の大学だと関係者間で情報の共有がされてない。本人も親御さんも、大学に障害を伝えることに抵抗がある。

入学前のイメージと実際の勉強が異なるとの訴えも多い。例えば、心理学科ではカウンセリングの勉強ばかりすると思っていたという学生も多い。心理学科は統計学の講義や実習の比重が高い。統計は分からないと言って困ることもある。また歴史が好きな学生は歴史学科に入り、年表を覚えるのが得意なので色々覚えれば良いと思っていたが、歴史学科に入ると、過去の難しい文献を読んだり、古文書を解説するなど実習が

あるが、予想外だったといって混乱する学生もいる。そのようなときに、学生の興味関心のあり方や知的な能力が学業内容にみあっているのかをアセスメントしなければならない。講義科目は優秀でも実習ができないこともある。

アセスメントに基づいて転学科、転学部や休学を勧めることもある。卒業後の本人や家族の希望は現実的か、この辺の視点が重要だと考えている。大学や学部によって方針は多様である。休学でも何でも認め、長くいてもらって、退学はなるべく避けるみたいな方針の大学もある。しかし、それは僕に言わせれば、問題を先送りするだけで、本当にその学生に素質がなく、向いていないとしたら早めに辞めてもらい、本人に合った所に行ったほうがいいのかも考えられる。

実習も同様である。実習がどうしても必要な学科で、それができない学生の場合、実習のない学科のほうがいいのかも考えられる、そのように現実的に考えていったほうがいいのかと考える。

また、女性の大学生は見逃されやすい傾向がある。穏やかな人も多く、いじめの被害、ときには性被害にも遭いやすい。人によっては相談スキルが乏しいこともある。人が良い方で、男子と仲よくなるが、本人は恋愛感情がない。しかし男子のほうは持っていることで誤解しやすいこともある。

大学では、ポジティブ要因として、高校までと違い、非集団主義で、講義の選択をできる、緩い、教員に変わった人も多いこともある。また、一人暮らしや寮生活ができる、リモート講義ができる。このようなポジティブ要因も、教室が毎回違う、履修登録が必要といったことはネガティブ要因になる可能性がある。リモート講義は、プラスにもマイナスにもなる人がどちらもいる。アクティブラーニングはASDの人は苦手な方が多い。

8. 問題解決ピアサポートプログラム

大正大学では問題解決ピアサポートプログラムを行っている。これは色々な問題を出してもらい、グループで7回セッションして相談する。イギリスの大学と一緒にやっていて、大正大学で今年3年目であるが、3年目は職員の方にも参加してもらった。学生と職員と教員で実施すると、とても職員の方の評判がよかったので、試してもいいのではないかと思う。一種の認知行動療法のセッションである。セッションで起きていたことを紙に書いてもらう。参加した学生は、色々な

問題解決の手順が分かってよかったという。いわゆる認知行動療法的にグループでディスカッションをして、一定の枠組みの中で問題解決のスキルを身に付けるというプログラムである。

II. まとめ

合理的配慮（合理的調整）は必要かつ適当な変更、調整を加えるということである。大事なのは、この必要かつ適当な変更、調整を実際に行う。ドアが壊れているために音がうるさいなら、ドアを修理する。それが適当な変更・調整である。そういう具体的なことを考えてく必要がある。

時々、誤解されるのは、職員でも学生でも教員でも、配慮願いを出されると、とにかく単位をあげなければいけないと思うことである。例えば欠席何回しても単位、受験資格を認めなければいけないと思う人がいるが、それは全く間違いである。もちろん大学である以上、一定水準の学習は必要である。そのための調整はするという事である。

学生との接し方で大事なものは信頼、共感と予告と論理的な対応である。信頼とは急な休講をしない、シラバスどおりの講義を実施することである。

学生個人の感じ方、見方に共感し、ステレオタイプな判断をしないこと、ロジカルに淡々と交流し、怒りなどの情緒的な感情をあまり出さないことが大事である。このような対応を適切に行うには個々の学生の専門的なアセスメント必要であり、学内に専門家がいない場合は、学外の専門家に助けを求めてほしい。

参考文献

- 宮岡等, 内山登紀夫(2018). 大人の発達障害ってそういうことだったのか その後, 医学書院.
- 内山登紀夫(2013). ライブ講義発達障害の診断と支援, 岩崎学術出版社.
- 内山登紀夫(2020). 特集「大人の発達障害」をめぐる最近の動向 大人の発達障害－診断概念の整理と研究テーマの動向, 精神医学, 62(7), 949-957. DOI : 10.11477/mf.1405206138
- 内山登紀夫, 西牧陽子, 黒田大貴 他(2022). 新入生サポート・プロジェクトでの取り組み－英国バース大学との発達障害学生支援のための共同研究を通して－, 大正大学カウンセリング研究所紀要, 45, 25-38.